

# おぎん

芥川龍之介

青空文庫



げんな  
元和か、  
てんしゆ  
寛永か、  
かんえい  
とにかく遠い昔である。

天主のおん教を奉ずるものは、その頃でももう見つかり次第、  
ひあぶ  
火炙りや礫に遇わされていた。しかし迫害が烈しいだけに、「万  
はりつけあ  
事にかない給うおん主」も、その頃は一層この国の宗徒に、あ  
あるじ  
らたかな御加護を加えられたらしい。長崎あたりの村々には、  
ながさき  
時々日の暮の光と一しよに、天使や聖徒の見舞う事があつた。現  
にあのさん・じよあん・ばちすたさえ、一度などは浦上の宗  
うらかみ  
徒みげる弥兵衛の水車小屋に、姿を現したと伝えられている。  
しゆう  
と同時に悪魔もまた宗徒の精進を妨げるため、あるいは見慣  
しゆうじん  
れぬ黒人となり、あるいは舶来の草花となり、あるいは網  
はくらい  
あ

代しろの乗物となり、しばしば同じ村々に出没した。夜昼さえ分たぬ土ろうの牢ろうに、みげる弥兵衛を苦しめた鼠ねずみも、実は悪魔へんげの變化へんげだったそうである。弥兵衛は元和八年の秋、十一人の宗徒と火炙ひあぶりになった。——その元和か、寛永か、とにかく遠い昔である。

やはり浦上の山やま里さと村むらに、おぎんと云う童女が住んでいた。お

ぎんの父ちちは母ははは大阪おおさかから、はるばる長崎ながさきへ流浪るろうして来た。が、

何もし出さない内に、おぎん一人を残したまま、二人とも故人になつてしまった。勿もちろん論ろん彼等他国ものは、天主のおん教を知るは

ずはない。彼等の信じたのは仏教である。禅ぜんか、法華ほっけか、それと

もまた浄じようど土どか、何なににもせよ釈迦しやかの教である。ある仏蘭西フランスのジエ

スイツトによれば、天性かんち奸智かんちに富んだ釈迦は、支那シナ各地を遊歴

しながら、阿弥陀あみだと称する仏の道を説いた。その後また日本の国へも、やはり同じ道を教おしえに來た。釈迦しゃかの説いた教によれば、我々人間の靈魂アニマは、その罪の輕けいちよう重じゆう深淺に従い、あるいは小鳥となり、あるいは牛となり、あるいはまた樹木となるそうである。のみならず釈迦は生まれる時、彼の母を殺したと云う。釈迦の教の荒誕こうたんなのは勿論、釈迦の大悪だいあくもまた明白である。(ジアン・クラッセ) しかしおぎんの母親は、前にもちよいと書いた通り、そう云う眞実を知るはずはない。彼等は息を引きとつた後のちも、釈迦の教を信じている。寂しい墓原はかはらの松のかげに、末は「いんへるの」に墮おちるのも知らず、はかない極樂を夢見ている。

しかしおぎんは幸いにも、両親の無知に染まっていな。これ

は山里村居つきの農夫、あわれ憐みの深いじよあん孫七は、とうにこの童女の額へ、ばぷちずものおん水を注いだ上、まりやと云う名を与えていた。おぎんは釈迦が生まれた時、天と地とを指しながら、「天上天下唯我独尊」と獅子吼した事などは信じていない。その代りに、「深く御柔軟、深く御哀憐、勝れて甘くまします童女さんた・まりあ様」が、自然と身ごもつた事を信じている。「十字架に懸り死し給い、石の御棺ぎよかんに納められ給い、」大地の底に埋められたぜすが、三日の後のちよみ返つた事を信じている。御糺明ごきゆうめいの喇叭らつぱさえ響き渡れば、「おん主あるじ、大いなる御威光ごいこう、大いなる御威勢ごいせいを以て天下あまくだ下り給い、土埃つちほこりになりたる人々の色身しきしんを、もとの靈魂アニマに併せてよみ返し給い、善人は天

上の快樂を受け、また悪人は天狗と共に、地獄に墮ちる事を信じている。殊に「御言葉の御聖徳により、ぱんと酒の色形は変わらずといえども、その正体はおん主の御血肉となり変わる」尊いさがらめんとを信じている。おぎんの心は両親のように、熱風に吹かれた沙漠ではない。素朴な野薔薇の花を交えた、実りの豊かな麦畠である。おぎんは両親を失った後、じよあん孫七の養女になった。孫七の妻、じよあんなおすみも、やはり心の優しい人である。おぎんはこの夫婦と一しよに、牛を追ったり麦を刈ったり、幸福にその日を送っていた。勿論そう云う暮しの中にも、村人の目に立たない限りは、断食や祈祷も怠った事はない。おぎんは井戸端の無花果のかけに、大きい三日月を仰ぎながら、しば

しば熱心に祈禱を凝らした。この垂れ髪の童女の祈禱は、こう云う簡単なものなのである。

「憐みのおん母、おん身におん礼をなし奉る。流人となれるえわの子供、おん身に叫びをなし奉る。あわれこの涙の谷に、柔軟のおん眼をめぐらせ給え。あんめい。」

するとある年のなたら（降誕祭）の夜、悪魔は何人かの役人と一しよに、突然孫七の家へはいつて来た。孫七の家には大きな囲炉裡に「お伽の焚き物」の火が燃えさかっている。それから煤びた壁の上にも、今夜だけは十字架が祭つてある。最後に後ろの牛小屋へ行けば、ぜすす様の産湯のために、飼桶に水が湛えられている。役人は互に頷き合いながら、孫七夫婦に繩をかけた。



おぎんも同時に括り上げられた。しかし彼等は三人とも、全然悪びれる気色はなかつた。靈魂アニマの助かりのためならば、いかなる責せめくも覚悟である。おん主あるじは必ず我等のために、御加護おんかごを賜たまはるのに違ちがはない。第一なたらの夜よに捕とらわれたと云うのは、天てん寵ちようの厚い証拠ではないか？ 彼等は皆云い合せたように、こう確信していたのである。役人は彼等を縛いましめた後のち、代官の屋敷へ引き立て行いつた。が、彼等はその途中も、暗夜やみよの風に吹かれながら、御ご降誕こうたんの祈いのちを誦じゆしつづけた。

「べれんの国にお生まれなされたおん若君様、今はいずこにましますか？ おん讚ほめ尊あがめ給え。」

悪魔は彼等の捕とらわれたのを見ると、手を拍うつて喜び笑わらつた。し

かし彼等のけなげなさまには、少からず腹を立てたらしい。悪魔は一人になった後、忌々しそうに唾をするが早いか、たちまち大きい石臼いしうすになった。そうしてごろごろ転がりながら闇の中に消え失せてしまった。

じよあん孫七まごしち、じよあんなおすみ、まりやおぎんの三人は、

土の牢ろうに投げこまれた上、天主てんしゆのおん教を捨てるように、いろいろの責苦せめくに遇あわされた。しかし水責みずせめや火責ひせめに遇つても、彼等

の決心は動かなかつた。たとい皮肉は爛ただれるにしても、はらいそ

(天国てんごく)の門へはいるのは、もう一息の辛抱しんぼうである。いや、

天主の大恩を思えば、この暗い土の牢さえ、そのまま「はらいその莊嚴と変りはない。のみならず尊い天使や聖徒は、夢ともうつ

つともつかない中に、しばしば彼等を慰めに来た。殊にそういう幸福は、一番おぎんに恵まれたらしい。おぎんはさん・じよあん・ばちすたが、大きい両手のひらに、蝗いなごを沢山すく掬い上げながら、食えと云う所を見た事がある。また大天使がぶりえるが、白い翼を畳んだまま、美しい金色こんじきの杯さかずきに、水をくれる所を見た事もあ  
る。

代官だいかんは天主のおん教は勿論、釈迦しやかの教も知らなかつたから、なぜ彼等が剛情ごうじようを張るのかさっぱり理解が出来なかつた。時には三人が三人とも、気違いではないかと思う事もあつた。しかし気違いでもない事がわかると、今度は大蛇だいじやとか一角獸いっかくじゆうとか、とにかく人倫じんりんには縁のない動物のような気がし出した。そ

う云う動物を生かして置いては、今日こんにちの法律たがに違たがうばかりか、  
 一国の安危あんきにも関かかわる訣わけである。そこで代官は一月ばかり、土の牢  
 に彼等を入れて置いた後のち、とうとう三人とも焼き殺す事にした。  
 (実を云えばこの代官も、世間一般の人々のように、一国の安危  
かかわにかかわるかどうか、そんな事はほとんど考えなかつた。これは第一  
 に法律があり、第二に人民の道徳があり、わざわざ考えて見ない  
 でも、格別不自由はしなかつたからである。)

じよあん孫まご七しちを始め三人の宗徒しゅうとは、村はずれの刑場けいじょうへ  
 引かれる途中も、恐れる気色けしきは見えなかつた。刑場はちようど墓は  
かはら原かはらに隣かつた、石ころの多い空き地である。彼等はそこへ到着す  
 ると、一々罪状を読み聞かされた後のち、太い角柱かくばしらに括くくりつけら

れた。それから右にじよあんなおすみ、中央にじよあん孫七、左にまりやおぎんと云う順に、刑場のまん中へ押し立てられた。おすみは連日の責苦せめくのため、急に年をとつたように見える。孫七も髭ひげの伸びた頬ほおには、ほとんど血の気が通かよつていない。おぎんも――おぎんは二人に比べくらると、まだしもふだんと変らなかつた。が、彼等は三人とも、堆うずたかい薪きぎを踏ふまえたまま、同じように静かな顔をしてゐる。

刑場のまわりにはずっと前から、大勢おおぜいの見物みぶつが取り巻いてゐる。そのまた見物の向うの空には、墓原むらの松が五六本、天蓋てんがいのように枝を張ひつてゐる。

一切いっさいの準備の終つた時、役人の一人は物々ものものしげに、三人の

前へ進みよると、天主のおん教を捨てるか捨てぬか、しばらく猶<sup>ゆ</sup>予<sup>うよ</sup>を与えるから、もう一度よく考えて見ろ、もしおん教を捨てる  
と云えば、直<sup>すぐ</sup>にも繩目<sup>なわめ</sup>は赦<sup>ゆる</sup>してやると云った。しかし彼等は答え  
ない。皆遠い空を見守つたまま、口もとには微<sup>び</sup>笑<sup>しょう</sup>さえ湛<sup>たた</sup>えてい  
る。

役人は勿論見物すら、この数分<sup>あいだ</sup>の間くらいひっそりとなつたた  
めしはない。無数の眼はじつと瞬<sup>またた</sup>きもせず、三人の顔に注がれて  
いる。が、これは傷<sup>いた</sup>しさの余り、誰も息を呑んだのではない。見  
物はたいてい火のかかるのを、今か今かと待つていたのである。  
役人はまた処<sup>しよけい</sup>刑の手間どるのに、すっかり退屈し切つていたか  
ら、話をする勇氣も出なかつたのである。

すると突然一同の耳は、はつきりと意外な言葉を捉えた。

「わたしはおん教を捨てる事に致しました。」

声の主はおぎんである。見物は一度に騒ぎ立った。が、一度どよめいた後、のちたちまちまた静かになってしまった。それは孫七が悲しそうに、おぎんの方を振り向きながら、力のない声を出したからである。

「おぎん！ お前は悪魔あくまにたぶらかされたのか？ もう一辛抱ひとしんぼうしさえすれば、おん主あるじの御顔も拜めるのだぞ。」

その言葉が終らない内に、おすみも遥かはるにおぎんの方へ、一生懸命な声をかけた。

「おぎん！ おぎん！ お前には悪魔がついたのだよ。祈ってお

くれ。祈つておくれ。」

しかしおぎんは返事をしない。ただ眼は大勢おおぜいの見物の向うの、天蓋てんがいのように枝を張つた、墓原はかはらの松を眺めている。その内にもう役人の一人は、おぎんの縄目を赦すゆるように命じた。

じよあん孫七はそれを見るなり、あきらめたように眼をつぶつた。

「万事にかなひ給うおん主あるじ、おん計はからいに任せ奉る。」

やっと繩を離れたおぎんは、茫然ぼうぜんとしばらく佇たたずんでいた。が、孫七やおすみを見ると、急にその前へ跪ひざまずきながら、何も云わずに涙を流した。孫七はやはり眼を閉じている。おすみも顔をそむけたまま、おぎんの方は見ようとしめない。



「お父様とうさま、お母様かあさま、どうか勘忍かんにんして下さいまし。」

おぎんはやつと口を開いた。

「わたしはおん教を捨てました。その訣わけはふと向うに見える、天蓋てんがいのような松こずえの梢こずえに、気のついたせいでございます。あの墓原の松のかげに、眠ねっていていらつしやる御両親は、天主のおん教も御存知なし、きっと今頃はいんへるのに、お墮おちになつていらつしやいましょう。それを今わたし一人、はらいその門にはいったのは、どうしても申し訣わけがありません。わたしはやはり地獄じごくの底へ、御両親あとの跡を追つて参りましょう。どうかお父様やお母様は、ぜすす様おそやまりや様の御側そばへお出でなすつて下さいまし。その代りおん教を捨てた上は、わたしも生きては居られません。………」

おぎんは切れ切れにそう云つてから、後は啜り泣きに沈んでしまつた。すると今度はじよあんなおすみも、足に踏んだ薪の上へ、ほろほろ涙を落し出した。これからはいそへはいろいろとするのに、用もない歎きに耽つているのは、勿論宗徒のすべき事ではない。じよあんな孫七は、苦々しそうに隣の妻を振り返りながら、  
 癩かんだか高い声に叱りつけた。

「お前も悪魔に見入られたのか？ 天主のおん教を捨てたければ、勝手にお前だけ捨てるが好い。おれは一人でも焼け死んで見せるぞ。」

「いえ、わたしもお供を致します。けれどもそれは——それは」  
 おすみは涙を呑みこんでから、半ば叫ぶように言葉を投げた。

「けれどもそれははらいそへ参りたいからではございません。ただあなたの、——あなたのお供を致すのでございます。」

孫七は長い間黙<sup>あいだ</sup>っていた。しかしその顔は蒼<sup>あお</sup>ざめたり、また血の色を漲<sup>みなぎ</sup>らせたりした。と同時に汗の玉も、つぶつぶ顔にたまり出した。孫七は今心の眼に、彼の靈魂<sup>アニマ</sup>を見ているのである。彼の靈魂<sup>アニマ</sup>を奪い合う天使と悪魔とを見ているのである。もしその時足もとのおぎんが泣き伏した顔を挙げずにいたら、——いや、もうおぎんは顔を挙げた。しかも涙に溢<sup>あふ</sup>れた眼には、不思議な光を宿しながら、じつと彼を見守っている。この眼の奥<sup>ひらめ</sup>に閃いているのは、無邪気な童女の心ばかりではない。「流人<sup>るにん</sup>となれるえわの子供」、あらゆる人間の心である。

「お父様！ いんへるのへ参りましょう。お母様も、わたしも、あちらのお父様やお母様も、——みんな悪魔にさらわれましょう。」

孫七はとうとう墮落した。

この話は我国に多かつた奉教人ほうきようじんの受難うぢの中でも、最も恥はずべき躓つまずきとして、後代に伝えられた物語である。何でも彼等が三人ながら、おん教を捨てるとなつた時には、天主の何たるかをわきまえない見物の老若男女ろうにやくなんによさえも、ことごとく彼等を憎んだと云う。これは折角せつかくの火炙りひあぶも何も、見そこなつた遺恨いこんだったかも知れない。さらにまた伝うる所によれば、悪魔はその時大歡喜のあまり、大きい書物に化ばけながら、夜中よじゆう刑場に飛んでいた

と云う。これもそう無<sup>むし</sup>性<sup>しょう</sup>に喜ぶほど、悪魔の成功だったかどう  
か、作者は甚だ懐疑的である。

(大正十一年八月)



# 青空文庫情報

底本：「芥川龍之介全集5」ちくま文庫、筑摩書房

1987（昭和62）年2月24日第1刷発行

1995（平成7）年4月10日第6刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房

1971（昭和46）年3月～1971（昭和46）年11月

入力：j.utiyama

校正：かとうかおり

1999年1月5日公開

2004年3月9日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。



# おぎん

芥川龍之介

2020年 7月12日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>